
最初で最後の恋

執筆復帰のカサキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最初で最後の恋

【Nコード】

N5007R

【作者名】

執筆復帰のカサキ

【あらすじ】

修太は中学時代のサッカー大会でライバル校のスタンドで1人の女の子に一目惚れをしてしまった

それ以来あの女の子に会いたいと思うがなかなか会えないまま1ヶ月が過ぎた……

俺は西峯修太で中原南高等学校の二年生でサッカー部に所属している
小さい頃から、サッカーに明け暮れていて小学6年の時に所属チー
ムを初の全国大会に連れて行ったが、自身は怪我によりペンチにも
入れずにチームは予選全敗で終わった

中学に入ると一躍サッカー部のニューヒーローとして活躍し、初の
四国地方大会に進出した

その後は3年の最後の夏に初の全国大会進出を果たした
しかし、怪我で全国の舞台に立てないまま初戦で敗退した

小中といずれも、怪我が原因で全国の舞台には立てないまま敗れて
いた

修太自身はいつも練習や試合に集中してはいるものの、それが返っ
て全国の舞台に行ける試合で大怪我をしてしまう羽目になっていた

中学卒業後は地元サッカー名門の中原南高等学校に入学した
練習はサッカー名門校だけあって厳しく、練習について行けない同
級生が何人も居たが、修太だけは練習について行き唯一部内紅白戦
に一年生唯一の参加を認められた

紅白戦では後半頭から出場を果たし、1ゴールの活躍を見せた
2年、3年からも唯一将来のエースとして扱われた

1年の夏はさすがにスタンド応援だったが、チームは2年振りに香
川県大会を制してインターハイ出場を果たした
けれども、全国のレベルは高く、しかも優勝候補の島根県代表の府
本東高等学校と初戦で当たり、歴史的な大敗を喫した

スコア		
中原南	0	9
府本東	0	7
	0	16

インターハイ後は3年の中で受験勉強（進学）を中心にしたい人以外は部活に残り、国体予選に照準を合わせた

国体予選ではまさかの予選リーグ敗退を喫した

その原因は主力の多くが進学を希望しており、受験勉強のために抜けたためだった

修太は1年で唯一ベンチ入りをしたが、試合には出れなかった

冬の全国選手権大会予選で初めてレギュラーとしてピッチに立ち、16年振りの出場を果たしたがまたしても、修太は怪我して大会には出れずに初戦で敗れた

一方で修太は入学してすぐに、人生で初めて女の子を好きになっ
ていた

その子は隣のクラスの子で、中学時代に一度サッカーの大会で会っていた

それはライバル校の人でとても、明るくて男女関わらず彼女の周りを囲んでいた

一度目が合ったときに柔らかい笑顔で手を振ってもらっていた

試合は修太の中学が勝ち四国大会に進んだが、修太は怪我で病院に行っていたため二度と会うことはなかった

久しぶりに会ったのが入学式の時だった

しかし、顔を会わせることはなくその日は終わり、その後2週間は会うことがなかった

新人生宿泊親睦会では修太風邪で寝込んでおり、せつかくのチャンスを潰した

その後はなかなか会えないまま1ヶ月が過ぎたある日、思いがけない出会いが恋の始まりだった

それは合同体育をする日の事だった

その日は男女ペアになり、ダンスを行うものだった

修太はあまり、女子とは話したこともなく自分から話しかけることもなかった

修太はこちらに向かって走ってくる女の子が目に入り、よく見ると気になっていたあの子だった

女の子は修太の前で止まると声をかけてきた

「はじめまして、あなたが西峯修太君？」

「えっ？そうだけど……」

「良かった、間違っていたら恥ずかしかったな／＼」

「そうか？俺もいきなり現れたから、ビックリしたよ？」

「そうなの？それはごめんなさい」

「いや、構わんよ!」
「ありがとう!」

2人は初めて言葉を交わした

「君の名前を俺は知らないんだけど?」

「私の名前?」

「ああ」

「私は藤波美緒よ?」

「藤波美緒さんかあ」

「そうよ?美緒って呼んでね?修太君?」

俺は藤波さんにいきなり下の名前を呼ばれて、驚いた

「えっ?」

「イヤだったかな?」

藤波さんは不安そうな顔に上目遣いして見ている

「いや、驚いただけだよ?」

「そうなの?なら、修太君って呼んでいいの?」

「ああ、いいよ!」

「ありがとう!」

2人はこの事をきっかけにたびたび会うようになり、2人の中も深まっていった

昼休みにはよく2人で弁当を食べたり、お喋りをしたりと日々同じ事を繰り返していた

放課後は修太の練習が終わるまで待っていたりと、周りからは付き

合っているのではとの噂もたっていた

しかし、修太はまんざらでもないようで、藤波さんに恋心を抱いていた

藤波さんも、今では修太に恋心を抱いている様子である

最初はただの友達として見ていたが、徐々に修太といることが日常的になり、修太を異性として見るようになっていた

そんなある日、1学期の期末試験中の午後に2人はサッカーグラウンドの縁のベンチに座った

今日はいつもとは違った雰囲気が漂っていた

2人の間に沈黙が流れていた

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

2人はチラチラとお互いを見ては逸らしていた

修太

（どうしようかな？今日、藤波さんに自分の気持ちを伝えようかな？それとも、もう少し待って……………いや、今日俺の気持ちを藤波さんに伝えよう！）

藤波さん

（どうしたらいいの？修太君に私の気持ち伝えた方が良いかな？それとも、もう少し待って……………ううん、やっぱり今日修太君に私の気持ちを伝えよう！）

2人は何か決意した様子で振り向いた

「あの！」

2人の声が重なった

「あついや、藤波さんから」

「うん、修太君から話して？」

「そうか？なら、俺から話すよ？」

「うん」

2人は一旦深呼吸した

修太は席を立ち、藤波さんの前に立った

藤波さんも席を立とうとしたが修太が止めた

「俺が藤波さんに初めて会ったのは中学のサッカー大会の代表決定戦だったんだ」

「…うん」

「その時に初めて女の子に恋をしてしまったんだ」

「……………」

「その女の子が藤波さんだったんだと思うと、藤波さんに笑顔で手を振ってくれたことを思い出すよ」

「……………」

「それ以来あの笑顔が忘れられなかった。毎日あの笑顔が夢に出てくるんだ」

「……………」

一旦修太は深呼吸をしてまた話した

「そして、高校で一緒に合同体育がきつかけですっかり仲良くなっ
た」

「うん、そうだね」

「それを気に一気に藤波さんに対する気持ちが一層強くなったんだ」

「……うん」

「今日、告白しようと思った」

「……えっ？」

藤波さんは告白との言葉に固まってしまった

「美緒、ずっと好きだった。だから、俺と付き合ってください」

「……」

「お願いします！」

美緒はその言葉を聞くと、目に涙を浮かべて、返事の代わりに修太
に抱きついた

「はい…私も修太のこと好き／／／」

「俺も美緒が好きだよ／／／」

修太の恋はついに叶った

修太はこの恋が最初で最後の恋だと信じていた

その後、2人は見事に結婚して子供にまで恵まれて、楽しい家庭生
活を送っていました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5007r/>

最初で最後の恋

2011年10月7日05時32分発行